

価値選択の議論と専門知の架橋は なおも可能なのか： ポスト真実の時代のバックエンド問題

早稲田大学レジリエンス研究所
第9回原子力政策・福島復興シンポジウム
2020年3月7日（土）
東京電機大学 寿楽 浩太

高レベル放射性廃棄物処分の「難しさ」(寿楽2013)

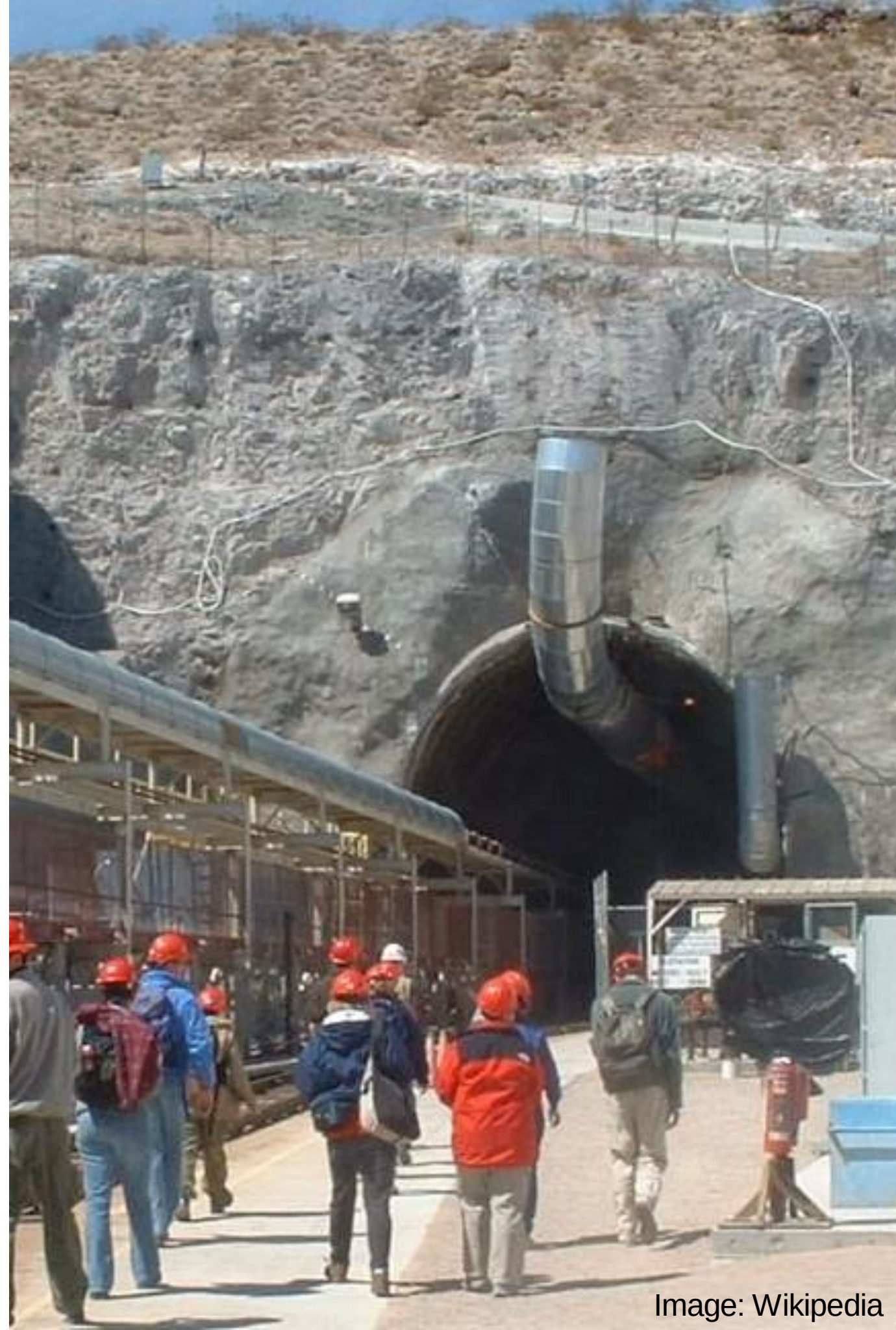
- ・ 「トランス・サイエンス」問題の極致としての難しさ
 1. 「安全性」の基準設定問題
 2. 時間軸の長さの扱い
 3. 「実証」の困難性
 4. リスクに対する基本的スタンスの選択
- ・ 上記に加えて、原子力利用に関する意思決定との関係も「難しさ」の一因

社会的な正当化の必要性

- トランス・サイエンス的問題に対する技術・政策パッケージは社会的正当化をなくてはならない
- 技術的な安全確保の論証だけでは不十分
- 科学的・技術的に決着しない問題、価値観により見解が分かれる問題については、専門知を参照しつつも民主的な手続きにおける人びとの熟議を通して結論出していくしかない

社会的な正当化の必要性

- ほとんどの原子力利用国が困難を経て対処の道筋を立て直してきた
- 技術論のみをベースにした処分計画の挫折
- 適応的・段階的なアプローチで漸進的に対処する方向に
- 市民参加の拡大による価値選択のプロセスの整備



国際的な議論からの教訓

- HLW処分は思っていたよりずっと「容易ではない」
- 不確実性への深い認識
 - 「無限責任の有限化」の問題（松本2009）
- 廃棄物を深地層に確実に埋設できるかどうかだけが問題ではない（むしろそれは問題のごく一部）
- 安全の論証だけでは社会の懸念には応えられない
- 形而上学的な側面の深い洞察と論理的・倫理的正当化が必要

国際的な議論からの教訓

- 正当性と正統性を確保するためには、市民やステークホルダーの参加を拡大・深化させることが必要
- 参加の拡大は価値選択の社会的意思決定のためにあるのであって、実施・推進側にとっての「社会的受容」の促進のためにあるのではない
- 実施・推進側にとっては自信・確信ではなく謙虚さ・慥さが信頼の伴

私たちは何を議論し、何を判断すべきなのか

- こうした価値選択の議論は、現行法の枠内でしか対処できない行政のレベルでは十分に扱えない可能性がある
- いい意味での「政治」の復権が求められている。公共的な課題について幅広く、闊達に議論をした上で民主的な意思決定を行い、行政にその結果を実行させるプロセスの再興が必要であるように思われる
- 私たちは議員などにそのニーズを訴えつつ、前掲のような価値選択の問題群についての私たち自身の考え、答えを練り上げることが求められるのではないか。市民相互の対話、専門家との対話などを通して議論を深めることが大切だろう

しかし、本当にそれでいいのか...

2020年代に向けて、

リアリティを喪失しつつあるのではないか...

「最終」処分が抱える潜在的矛盾

- HLW推進側専門家を中心とする国際的な議論では、将来世代の負担とリスクの回避、（特に中長期の）将来の不確実性への配慮を交えて、この40年ほど、「最終」処分を現世代で行うことの正当化が試みられてきた
（ OECD/NEA 1977;1995; 2011, etc., NAS 1990; 1995; 2001; 2003, etc. ）
- しかし、特に90年代以降、段階性、適応性、可逆性・回収可能性といったように、「最終」処分の「最終性」を修正する議論が並行

何が矛盾を解消するのか

- しかし、論理内在的に（本気で）矛盾を解消してきた（できた）とは思えない
- 「最終」なのに常に「暫定的」
- むしろ、「暫定的」だからこそ「最終」が社会に認められた？
- 「やっぱり何か変」は、本来は捨て置いてよいものではないはず

「最終」処分という企ては常に暫定的

- 「皆で話をここまで追い込んだから、いったんここで納得しよう」という暫定的合意としての「最終」処分
- 議論と手続きを尽くしつつ、ポイント・オブ・ノーリターンをつくらない工夫をする（典型的にはR&Rを導入する）ことで、「無限責任の有限化」をする
- 「統制的理念」としての「世代間の公平性」もこの文脈で見ろべき

何が矛盾を解消するのか

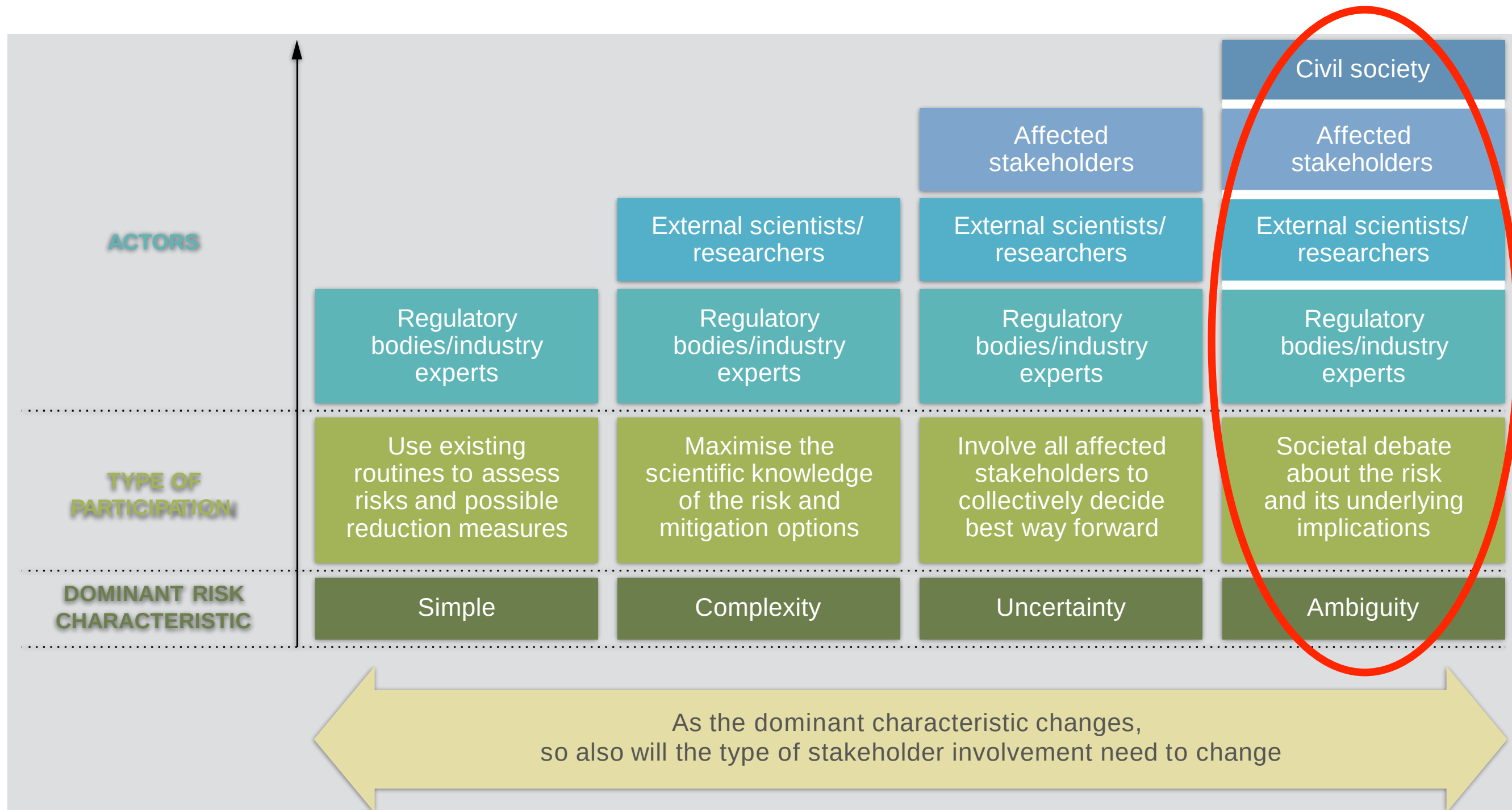
- 西欧近代的な諸価値と手続きによる調停がそこを（見かけ上、かもしれないが）補ってきた
- デューなプロセス、コンセンサス、熟慮（熟議）、コンセンサス...
- そういう流れと時代精神の中でのSTS（科学技術社会論）における市民参加論、あるいはIRGC（国際リスクガバナンス評議会）に代表されるリスクガバナンス論の展開
- ハーバーマスの規範的要素と、ルーマン的な状況認識の微妙な同居関係

リスクの性質とリスク管理の戦略

		Characteristic of the risk			
		Simplicity	Complexity	Uncertainty	Ambiguity
Target of the strategy	Impact of the risk - exposure - vulnerability Strategies directed at the risk absorbing system	Routine-based ▶ e.g. regulate	Robustness-focused ▶ build stronger, contain	Resilience-focused ▶ prepare to cope with surprises	Discourse-based ▶ build tolerance, resolve conflicts ▶ build confidence & trustworthiness
	Source of the risk - hazard Agent-based strategies		Risk-informed ▶ avoid, reduce, transfer, retain	Precaution-based ▶ be prudent ▶ do not make irreversible decisions	

IRGC (2017)

ステークホルダー関与の「階段」



IRGC (2017)

例：社会的フィクションとしてのR&R

- 2011 OECD/NEA報告書：「R&R報告書」
 - 「可逆性と回収可能性を求める社会的な圧力は、具体的に回収の用意をするということを特に求めるというよりはむしろ、可逆性のない段階を避け、公衆参加型の意思決定プロセスを積極的に維持しようとする方向性を有しているのかもしれない」

（強調は講演者が追加）

OECD/NEA (2011) が示す「Rスケール」



図 3: 「R スケール」廃棄物の事業段階、深地層処分場の回収可能性の程度、受動的 管理か能動的な管理か、回収コストの変化を図示したもの。作業段階の例は、処分施設内 にあるすべての廃棄物パッケージが、事業の同じ段階にあるとは限らない。

注意: 図示された四角形の正確な比率は、処分場のdによって変わる。

密輸されている前提：「歴史の終わり」

- もしかすると、結局のところ、「西欧近代的な市民社会の永続性の想定」という要素が「最終」処分の議論に密かに滑り込んでいるのかもしれない
(未来がそうではなくなる可能性を「最終」処分正当化の理由にしているにもかかわらず)
- 「最終」処分の正当性は「将来世代もきっとわかってくれる」に支えられており、最終のはずなのに残っている暫定性も、そこに寄りかかってうやむやにされているのかもしれない
 - cf. 世代間の「非同一性問題」

西欧近代の一つの到達点としての最終処分

- 北欧2カ国である時期に話が進んだことはおそらく偶然ではない
- 「市民社会」「民主主義」の手応えの確かさ
(人口規模、高福祉国家、歴史的な国の成り立ち...)
- 冷戦の終結と西欧の「春」
- 理性によるリスク問題の克服という「大きな物語」

しかし、それはまだ有効な見立てなのか？

- ・ 「ポスト真実」の時代

- ・ 少なくとも表面的には衆愚の危機を感じさせる現象

- ・ その結果として、衆愚への警戒感が衆愚的に出

- ・ 現 権威の喪失→専門家の信頼も喪失

- ・ 「最終処分」のレトリックが土台から崩れ、正当性も正統性も失いかねない？

考えてみれば...

- すでに2000年代から、市民参加論一辺倒には注意喚起する議論もあった
- H.コリンズらの問題提起による、STSでの「第三の波」論争（2002～）
- しかし、例えばアメリカのSTSではそれはほとんど省みられてこなかった（単なる保守反動の動きとして黙殺？）
- でも、そのアメリカは依然としてトランプイズムの渦中にある

叢書・ユニベルシタス 1055

我々みんなが 科学の専門家なのか？

ハリー・コリンズ 著
鈴木俊洋 訳



価値選択の議論と専門知の架橋は なおも可能なのか

- 社会科学からのこの問題へのアプローチは、適切な方法を採用することで、価値選択の議論と専門知の間は架橋され、正当性と正統性の両方を満足できると考えて、分析や対処策の提示を目指してきた
- それは20世紀的な西欧民主主義の規範的立場を拠り所としている
- 特にSTSは、その上での実践的関与を標榜し、専門家、政策決定者、市民などに働きかけを加えてきた

価値選択の議論と専門知の架橋は なおも可能なのか

- しかし、今や、誰もそれを歓迎しない時代状況が否応なく生じているのかもしれない
- それを是とする規範的立場そのものが掘り崩されているからだ
- 他方で現代社会のリスクはいよいよ複雑化・遍在化している。私たちは「災厄の連続」を生きるような状況になっている
- ではどうすべきなのか？何ができるのか？